



いい学校がなかったらどう思う

親のクセ——その1

世間ではいい学校と言っているのは、成績のいい子が集まってくる学校のことです。それも、入学するときの成績が目安になっている。お子さんがいい学校に入れたとしても、卒業するまでに学力が伸びるかという点、それはわかりません。もしかしたら、逆かもしれません。

まず、学校にいい悪いがあるということはお忘れましょう。そのかわり、そこに通っているあなたのお子さんが、いい生徒なのかどうかということに注意してください。それが一番だいじなことです。

たとは、受験のことを考えてみましょう。学校が試験を受けるのでしょうか？ そうじゃない。生徒が受験するんですよ。そうしたら、どんな学校にいようときちんと予習復習をして学力を伸ばしていけば、必ず合格できます。だったら、いい学校に行こうとすることにどんな意味があるのでしょうか。私はほとんどないと思います。

先日、ある大学生と話をしたのですが、彼がこんなことを言っていました。自分は野球少年だったから、高校を選ぶときに甲子園に出場の可能性のある商業高校を選んだ。そうしたら、お前はもったいない学校にいける成績があるのに何でそんなところを選んだって、先生に言われ、親に言われ、親戚にも言われて大変な目にあつた。でも僕は野球をやりたいからその学校に行きました。結果として甲子園には出場できなかったけど、それは自分たちの力が足りなかったんだからしょうがない。それに甲子園に行けなかったからすべて終わりじゃなくて、僕は大学に進みたいと思った。だから、人一倍勉強してちゃんと合格してみせました。と、自分のやりたいことをやってどこが悪いんだと文句を言っていました。こういうユニークな学生さんは大変たのしいですね。

つまり一番だいじなことは、子どもが学校ではなくて自分自身に自信をもつことです。そして親は、そういうお子さんを信頼してあげること、これが大切なことです。

勇気ができる元気ができる教育論

高校生活の

お話 ● 東京工業大学教授(社会学)

橋爪 大三郎



【プロフィール】

1948年生まれ。

「社会学の本を図書館で探して読んだら、おもしろそうだった」という理由で、高校2年のとき進路を社会学に決める。

1967年、東京大学文科Ⅱ類に入学。

1977年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。

その後1年間、無所属で執筆に専念。自分の関心に即した論文を書き続ける。

1989年東京工業大学助教授就任。

1995年同大教授に就任。

「はじめの構造主義」「冒険としての社会科学」

「現代思想はいま何を考えればよいのか」など、著書多数。

日常生活とは無関係と思われる社会学・歴史・哲学が、

日常生活のなかでどのように役立つのかを誰にでもわかるシンプルな言葉で表現。

「簡単な言葉で語る社会学者」と評され、

教育現場から院生、国際機関、恋愛にいたるまで、さまざまな分野から意見を求められている。

朝日新聞「ベストセラー診断」、毎日新聞「雑談を読む」の連載を持つほか、

テレビ・雑誌など各メディアで多彩に活躍中。

この4月、文系・理系の枠をとり払って学ぶ東京工業大学・社会理工学研究科(大学院)を新設。

これまでの日本になかったプログラムとして、教育界はもちろん企業からも注目を集めている。

日本は、ずっと受験地獄が続いているといわれています。

「どうして、みんなそんなに熱心に入学試験を受けようとするのだろうか」と聞いてみると、多くの人が「だって、いい学校に行かせたいでしょ」と答えます。「じゃあ、いい学校ってどういう学校ですか」と聞くと、「それは上のいい学校に入れる学校」という答えが返ってきます。

私が考えるいい学校とは、その子に合ったいい教育をしてくれる学校です。もともと5の力しかなかったのを7まで伸ばしてくれたらいい学校。その子が、「ああ、学校に行つてよかったなあ」と思える学校です。

でもお母さんのなかには、とにかく世の中にはいい学校があつて、そこへ行けば、うちの子もいい学校のいい生徒になるんじゃないかと思つている人がいます。

それは、はっきり言つて錯覚です。世間ではいい学校と言っているのは、成績のいい子が集まってくる学校のことです。それも、入学するときの成績が目安になっている。お子さんがいい学校に入れたとしても、卒業するまでに学力が伸びるかという点、それはわかりません。もしかしたら、逆かもしれません。

まず、学校にいい悪いがあるということはお忘れましょう。そのかわり、そこに通っているあなたのお子さんが、いい生徒なのかどうかということに注意してください。それが一番だいじなことです。



自分のクセを親に上げる

口を開けば「たまたまには」勉強しなさい「宿題はやったの」「いいまじでだらだらテレビばかり見るとの」「とか言っていますか？ 気持ち悪いです。何が効果もありません。」「自分の高校時代を思い出してみて下さい。」「そんなこと言いたくない」「こんなお母さんには無理がある」「とかいふ女達との約束がある」「とかいふんなことを言っていて、そんなにきちんきちゃんと勉強なんかしていなかったんじゃありませんか？

高校生というのは忙しいのです。勉強ばかりしているわけではありませんが、お子さんにしてみれば、自分がだいたいだと思つたことを勝手にやっているはずなんです。そのなかで、勉強させられなりに位置つけて、自分の責任をやらせているところなんです。そこへ親が出て行って、「こんなことはやらなくていいから、勉強しなさい」「つて言ったり、子どもは自分の自主性を損なわれたと思うでしょう。ですからカチンときて口げんかになったり、ふくれたりして、やるはずの勉強もやらなくなる。これでは逆効果になるばかりです。

自分も同じだったのに、なぜ親にな

ったとたん子どもにそういうことを言いはじめたのでしょうか？ それは多分「親にならな」とあつたとき勉強しておけばよかったなあ。そうすれば今、もっとこんなこともできたのになあ」と思つてしまつたからでしょう。それで、ついでに注意してしまつたわけですね。

でも、それはお門違いといつてもいいです。あのとき勉強しておけばよかったなあと思つたり、お父さん、お母さん！今からでも遅くはないので、自分が勉強を始めましょう。

子どもが自分で勉強しようと思つた時は、親がいくらやらせようとしても無理です。どんなときに子どもがそう思つたかという、親が自分の目標をもつて、ねじりはさまきで何かやっていると看做す。

魚屋さんだったり魚を一生懸命に売る、主婦だったり家事を一生懸命にやる。どんなことでもいいのです。そういう親の姿を見て、自分もやっていると信じているんだあと子どもが感じるこのでできる親子関係になれば、ガミガミ説教しなくても、子どもは自分なりにがんばると思つたのではないのでしょうか。



自分のクセを親に上げる

昔の人はいいことを言いました。「かわいい子には旅をさせる」と。子どもにラクをさせたいというのは、その反対ですね。そんなことを考えたら子どもは必ずダメになります。

親として子どもを教育する場合、忘れてはならないことがいくつかあります。第一に、たいていの場合、親は子どもより先に死ぬということ。子どもは自分のうち自分の目の届く部分は、半分くらいだと思ひましょう。親がいなくなつたあと、子どもは何十年も自分の力で生きていかななくてはなりません。そのとき親は何にもできないのです。

第二に、子どもを育てる目的は、子どもを独立したひとりのおとなにするということ。そこで教育は完了。といつても親子ですから、たまには仲良く一緒に食事をしたり、旅行に行ったりするかもしれないが、ふだんの生活は別々です。独立するわけですね。そうなつたら、子どもの人生はもう子どものものだから、親の出る幕はありません。これが教育の目的です。

そうすると子どもにとって一番幸せなことは、自分は何をやりたいのか、自分は何が欲しいのかという価値観をはつきり持つていくことです。次に、自分がやりたいことや自分がほしいものを手に入れる能力をもち、実行できることです。目的を達成できるかどうかは子どもの問題であつて、がんばれば

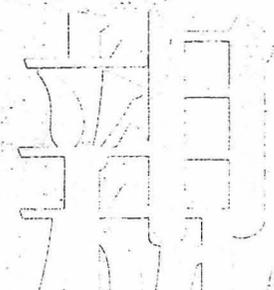
ばつまくいくかもしれない、運が悪くて達成できないかもしれない。でもそれは子どもの人生ですから、子どもはそれで幸せだと思つてしまつた。一番不幸な子どもは、自分が何をやりたいのかわかっていない子どもです。親が何でも子どものやることを決めてしまつと、自分で考えることのできない人間になってしまう場合があります。私は家庭教師を長年やってきましたので、いろいろな親子をみてきました。親が口出しをしすぎて、子どもの人生を台無しにしてしまつケースも少なからずありました。

私の知りあいの学者さんに、すばらしい業績を残しているドイツ人がいます。その先生は17歳のときに親にお尻をけつ飛ばされて、家から放り出されてしまったそうです。それから、自活をしたので大変だったけれど、こんなくしょつと思ひながら、自分の適性を極めつつ学問の道に進んだということです。今は自分で研究所を構えて手広くやっております。これからは、そういう独立独歩のユニークなパーソナリティーの人がたくさん出てくると思ひます。

子どもにラクをさせたいと思つてあつたら、自分がラクをしたいと思ひまじょう。家事の分担などを子どもにさせ、サッサと子どもを独立させまじょう。そのほうが子どもにとつてもプラスになるはずですよ。



人と違っていると不安になる



人と違っていると不安になるのは人情の常ですが、しばしば危険な場合が多いのです。

私の専門ではないのですが「ゆらぎ」という学問があります。そこで出される例にソウリムシのべん毛があります。ソウリムシのべん毛というのは、いつもザワザワと一方向に流れているのですが、たまに一本だけ違う動きをしているヤツがいるんです。

べん毛が同じ方向に流れていることで、ソウリムシの進む方向が決まってくるのですが、それは隣のべん毛がこっちに動いているから自分も同じように動く。要するにみんなのマネをしているんです。その結果、流れる方向がそろっているんです。

では、ソウリムシはどうやって方向を変えるのでしょうか。実は一本だけ違う動きをしていたヤツがセンサーになるんです。行き止まりになってこれ以上前に進めず、みんなが困ってバタバタしているとき、初めから違う方向に動いているヤツがいることで、じゃあ、コイツに習おうと方向を変えることができるんです。

全体としては好調で、みんながこれでいいんだと思っているときでも、違う考え方をしている者がいてくれないと全体にとっては危険です。全体の安全のために、そのほうがいい。その人が全体を救うということがあり得るんです。

今は世の中全部が、あっちへドットと走っていったかと思つて、あるとき

急に違う方向にドットと走っていくそんな時代です。

思い出してみよう。1950年代、どういふ会社に入らなくていいかというところ、糸ヘンとか金ヘンがいいと言われました。紡績や造船が外貨をかせいで一番景気がよかつたからです。今はどうですか？ 紡績なんて見る影もありません。造船はほとんど韓国に仕事を奪われてしまいました。次には石油化学と言われた。次は自動車。80年代には銀行とか証券会社と言われました。いまの銀行・証券会社を見てください。

というわけで、あてにならないのです。今、安全だと思われているルートに子どもを乗せてしまうことは、みんなが乗っているのは危険です。つまり、共倒れでアウト！ということになりかねない。

逆に、もしお子さんが、僕はこれが好きだ、今はまったく流行っていないけれども、これしかないと思うというものがあつたら、人となんかに違っていてもその道を進ませたほうがいい。一生芽が出ないということもないではないですが、みんなと同じ場合よりも危険が少ない。競争相手が少ないから生きていける可能性が大きいのです。みんなと同じ道を進んでいると、いらなくなつたときには下サツとリストラつていくことになりま。

ですから「人と違っていると不安」ではなくて、「人と同じだと不安になる」。これが正しいのだと思います。



文系・理系両方の教育を受ける

日本の大学には文系・理系というのがありますがね、高校でもそれに合わせて文系クラス・理系クラスをつくってしまっています。はつきり言つてこれは時代遅れです。文系・理系の区別があるのは、私の考えでは途上国の特徴です。では、なぜこのような形がつくられたのでしょうか。

明治時代のことでした。日本にはお金がないので、教育費を節約しようと思つた。お金がかかるのは医学教育、工学教育です。実験室や医薬品が必要ですからね。そこで人数制限をしたわけです。数学ができる人は医学部・理学部・工学部に進んでいいが、できない人は文学部に行きなさい。こう決めました。それが今までもずっと続いて、日本中の大学が理系・文系に分かれてしまったのです。これは日本の教育の大欠陥です。

アメリカの例を考えてみましょう。アメリカの学部は文理学部といつて、芸術も数学も社会科もひとつの学部で教えます。そこでは基礎を勉強して、医学とか、法学というのは大学院にいったから学びます。細かな専門は学部を卒業してから考えるシステムになっているのです。大学の学部を卒業するだけだったら、文科も理科も両方を勉強して就職します。

なぜでしょうか。これは簡単です。いまどき文系しかわからなくてできる仕事はないし、反対に文系のことばかりわかつた研究室オタクになつていてできるような仕事もないからです。

ではどうして日本は、文系・理系に分かれたままで何とかがやいてこられたのでしょうか。それは会社の採用が、文系と理系の枠になつているからです。人事・総務・営業は文系の人がある。そして開発や研究や現場は、理系の人がある。日本の企業は、長い間ほとんどこの考え方でまわりました。手分けをして会社を支えよう、というシステムです。

文系・理系に分かれた教育は、会社の歯車にしか入れない人間をつくり出します。知識が偏つていますから、独立しようにも一人では何もできない。だから日本ではベンチャービジネスが起りにくいのです。

これからの社会で、人間として自立していくためには、そして本当の意味で職業選択の自由を自分のものにするうと思つたら、文系・理系の両方を勉強しておく必要があるのです。

今もこれからも私たちの社会会社、そこでの仕事はどんどん変化しています。文系理系両方の力が必要なのは間違いない。古い制度や区分けにまどわされることなく、お子さんには、専門と関係のない科目もしっかり勉強しておくことが大切だとアドバイスしてあげてください。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』1996.2.10発行 pp.174 朝日新聞 おまけ

制度の生成 3



橋爪大三郎
『言語ゲームと
社会理論』
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中のみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィト

ゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を援用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

1996.2.10発行 pp.177 朝日新聞 おまけ

性愛のかたち・
家族のかたち 2



橋爪大三郎
『性愛論』
岩波書店・1995年

性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書はこの性愛をめぐる謎に社会科学的方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」(=性愛領域が他の社会領域から隔てられていること)を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデ

オロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人たち」にすすめの一冊。

私は日本の歴史のなかで、幕末維新のころが一番好きです。あのころの日本人はみんな気骨があつて、やりたいことが明確でした。家を捨て、故郷を捨て、藩を捨て、そして自分の人生と国家の大事を考えていく。そういうタイプの人間が大勢現れたから、大きな仕事ができただけです。そのときに親の出番があつたでしょうか。

なくて七癖、親のクセ。ついつい出てしまふような親のクセを5つあげてみました。いかがですか。まだまだありそうですか。七癖のあとのふたつはそれぞれ自身で考えてみてください。

高校時代に 独立独歩の種をまいて あげてください

現代にも同じことが言えます。今は社会がチマチマ小さくなっていると言われていますが、本当は流動化していて、どうなるかわからない疾風怒濤の時代です。そういうときほど、親の出番は少ないのです。親にできることは、子どものうちに独立独歩の種をまいておくことしかありません。ここであげた親のクセは、その反対でお子さんの独立独歩の芽を摘み取ってしまうものです。これから迎える高校時代。お子さんが、本当の意味で独立した人間に成長するために、これらのクセを退治して、独立独歩の種をまいてあげてください。

